

Between アンテナ

大学情報をまとめて紹介



愛媛大学

国内唯一の医農融合による公衆衛生大学院

愛媛大学は2022年4月に、医農融合による公衆衛生大学院「医農融合公衆衛生学環」を設置する。withコロナの時代に、幅広い分野へ高度な公衆衛生人材を送り出し、健康増進、疾病予防、感染症対策に寄与することが目的。同大学の医学系研究科が持つ疫学、保健医療管理学、ヘルスデータサイエンスの知識と技術に関する強み、農学研究科が持つ環境汚染物質の測定や食品機能性評価の技術、食品衛生の知識と技術に関する強みの双方を生かした教育を展開する。初年度の募集人員は5人。修了生の進路として医師・看護師等の医療従事者のほか、保健師・栄養士、行政職員など健康に関する実務者も想定している。



広島県内4大学

地域企業との連携組織を新たに立ち上げ

広島大学は2021年10月、広島県および県立広島大学、広島市立大学、観啓大学と連携し、次世代型産学官金連携支援コンソーシアム「ひろしま好きじゃけんコンソーシアム」を発足させた。地域の大学が持つ人材育成や研究開発、新産業創出に関する知見を統合することで、新たなビジネスモデルや付加価値の創出を図り、地域経済の活性化をめざす。

コンソーシアムではSlack等のコミュニケーションツール、Wrike等のプロジェクトマネジメントツールを積極的に活用し、企業ニーズと大学研究成果とのマッチング、大学と企業・自治体との人材交流の促進、大学発ベンチャーの支援などに取り組む。これまで大学との連携に積極的に関与できなかった地域の中小企業を含めて、大学のノウハウを広く提供していく考えだ。



コンソーシアム発足の記者会見の様子



東京工業大学・多摩美術大学・一橋大学

価値創造スキルを磨くプログラムを開講

東京工業大学は多摩美術大学、一橋大学と連携し、文部科学省の2021年度「大学等における価値創造人材育成拠点の形成事業」に採択された価値創造人材育成プログラム「Technology Creatives Program(通称テックリ)」を2022年度から開講する。同事業は、先端技術を活用して社会共創の機会をつかむプログラムの開発と拠点形成を目的とし、エンジニアとデザイナーが価値創造スキル(創造性・感性・デザイン性・企画力等)を身に付け、自らリーダーシップを発揮して課題発見・解決の提案、実施を先導できる能力、およびマインドセットを備えた「尖った人材」の輩出をめざす。社会人対象の約6か月のプログラムでは、テクノロジー、アート・デザイン、ビジネスの大学および連携企業による全方位指導体制を通じて価値創造人材に必要な能力育成とネットワーク構築を図る。プログラム履修生の募集は2022年7月開始予定。



芝浦工業大学

卒業証明書、成績証明書をデジタル発行

芝浦工業大学は、一般社団法人国際教育研究コンソーシアムとアイルランドのIT企業Digitary社の協力の下、2021年10月から学修歴証明書のデジタル発行を開始した。デジタル化により同大学の学生、卒業生は、世界中のどこからでも自身の卒業証明書や成績証明書などを入手でき、企業等に示すことができるようになる。学生・卒業生にとっては海外留学時、海外企業への就職時に役立つほか、大学にとっては海外提携校との学修歴証明書の電子共有が可能となる。これにより留学生対応の際の効率化が見込まれるとともに、紙の証明書を減少させることができ、SDGsへの貢献も図れるという。



横浜国立大学

全国初の台風研究機関を設置

横浜国立大学は2021年10月、先端科学高等研究院に台風科学技術研究センターを設立した。地球温暖化により激甚化しつつある台風のリスク低減、および再生可能な台風エネルギーの活用による脱炭素社会の実現への貢献をめざす。センターには、台風の観測的研究やデータ解析研究に取り組む「台風観測研究ラボ」、台風の高精度予測を研究テーマとする「台風予測研究ラボ」、台風エネルギーによる発電や蓄電の研究・技術開発を行う「台風発電開発ラボ」、社会価値創出の観点から研究成果の社会実装を進める「社会実装推進ラボ」の4つのラボを配置。台風や気象の研究者のほか、海洋開発や船舶工学、数値解析モデリング、法学など多彩な分野の研究者が集まり、研究を推進する。

探究学習の現場から

学びたいことを
見つける機会をつくる

本校が探究学習プログラム「My Project」をスタートさせたのは、2018年度からです。本校は都立の併願校というポジションのため、第一志望入学ではない生徒も一定数います。学びへのモチベーションが低く、漫然と高校生活を送る生徒も少なくありませんでした。大学進学では指定校推

なぜ、その大学、学部なのか？

進路選択の根拠を生み出す

「My Project」

第6回 上野学園中学校・高等学校

▶設立：1904年 ▶種別：全日制／普通科・音楽科／共学 ▶生徒数：1学年約200人
▶建学の精神：人間としての「自覚」を持つこと
▶2020年度合格実績：国立大は、秋田県立大、東京芸術大に、2人合格。私立大は、東京理科大、青山学院大、中央大、立教大、日本大、東洋大、千葉工業大、帝京大、東京農業大、桜美林大などに延べ263人が合格



進路指導部主任 探究科主任

竹澤 陽介

たけざわ しょうすけ ●教職歴16年。2014年度から中学校での探究活動の開発を始め、2018年度から高校での探究に携わる。2021年より現職。



▲(写真上)廊下の壁のゼミごとの掲示スペース。生徒は自分の興味があることを付箋に書いて貼り、仲間を見つける。(左下)生徒がゼミ長を務める。3年生による下級生のサポートも。(右下)探究学習にはタブレット端末が欠かせない。

上野学園高校の探究学習

内容 1年次は「自己探究」がテーマ。マインドマップの作成や個人の興味に基づく探究学習に取り組む。2、3年次は、自分の興味に応じてゼミに所属。チームでテーマを設定し、それぞれの方法で内容を深める。

対象・期間・時数

・普通科、音楽科全ての生徒が1～3年次に履修
・「総合的な探究の時間」(週1コマ)を活用

体制

・探究科が全体をデザインし、各学年の教員が指導
・大学教員や専門職の社会人、地域住民のサポートを受ける

テーマ例 ※2020年度のテーマ(一部抜粋)

「体調の傾向と教育の変化」(保育福祉ゼミ)／「東京五輪後の台東区のホテルの今後」(人文ゼミ)／「持続可能な通学靴」(芸術表現ゼミ)など

評価方法

・研究の内容とプレゼンなどの表現をルーブリックで評価
・チーム内の生徒同士による相互評価の機会を設ける

「My Project」3年間の流れ(高校の例)

	1年次	2年次	3年次
内容	「自己探究」	「ゼミ形式での探究」	
	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりが興味、関心に基づき情報を集めて、マインドマップを作成。自分の適性を見つける。 自分がより深く知りたいと思うテーマについて研究。大学の研究者や企業人に自らアポイントを取ってインタビューし、考えをまとめてポスター発表。 	<ul style="list-style-type: none"> 桜美林大学の探究プログラムに参加。チームでの探究活動のプロセスを体験し、全体のレベルアップをめざす。 9つのゼミに分かれて、テーマごとにチームで研究を進める。 3年12月に開催する「チャレンジステージ」で研究成果を発表。希望者は校外の探究コンテストに応募。 	

*取材を基に編集部で作成。

探究プログラムを始める前と後で、大きく変わったのが、「Who are you?」と問われたときに、生徒が自分

根拠を持って志望理由を言語化

薦に頼りがちで、ミスマッチから進学後に中退するケースもありました。こうした状況を変えるべく、「高校時代にやりたいことを見つけ、大学進学につなげる機会を用意したい」と考えたのが、この取り組みを始めたきっかけです。このプログラムはもともと上野学園中学校で行っていた「フィードバック」の授業を発展させたものです。本校が校舎を置く上野は、国立科学博物館や国立西洋美術館、上野恩賜公園など、教育資源に恵まれた場所。少し足を伸ばせば日本らしい文化が残っている浅草があり、外国人観光客にインタビューすることもできます。中学ではこの立地を生かし、校外に出て情報収集やレポートの作成に取り組ませています。

高校からは本格的に探究をスタートさせます。1年次は個人で取り組む「自己探究」がテーマ。マインドマップを作成し自分の興味を可視化したうえで課題を決め、大学の研究者や社会人にインタビューしながら、自身の考えをまとめます。

2年次からはグループでの活動に移ります。1学期は桜美林大学が提供する探究プログラム「デイスカバ！」に参加し、チームで取り組む探究のプロセスを体験し

るようになりまし

加えて生徒には、学校の壁を越えて大学の研究者や大学生、地域の方々の話を聞くことを推奨しています。そもそも本やネットで調べればすぐに答えが出るようなテーマは認めていないため、自分でアンケートを取ったり、専門家に質問したりしなければ答えにたどり着けません。自分の手でつかんだ一次情報があるからこそ、生徒は自分の探究を自信を持って語るようになるのです。

ゼミではICTも積極的に活用しています。1人1台、タブレット端末を所持し、情報収集やアイデアの共有、アンケートの分析、発表のまとめなどにどんどん使っています。今では生徒同士、生徒・教員間のコミュニケーションもなくてはならないものになっています。

大学への期待

高校生と研究者をつなぐ オフィスアワーを設けて

探究学習には、専門家の助言が欠かせません。メールやオンラインでも構わないので、生徒が大学の先生に気軽に質問できる、高校生向けのオフィスアワーがあるとうれしいですね。「○○について探究したい人募集!」みたいな形で大学の研究室を生徒に聞くような広報のしかたもあるのではないのでしょうか。

コース、クラス、学校の壁を取っ払って

「My Project」を展開するにあたっては、学校の内外にある「壁」をできるだけ取り払いました。多くの人と関わり、多様な意見に触れる中でこそ、生徒は自分の興味や役割を自覚し、成長できると考えたからです。例えば、生徒はクラスの枠を越えて、自分の興味に合わせてゼミを選び、グループを組みます。各ゼミを担当する教員も、自分のクラス外の生徒や、専門外のテーマを指導します。教科の授業とは異なり型がないので、その場での生徒一人ひとりの様子を観察しながら、生きた授業を展開します。生徒の評価も、クラス担任、部活担任に加え、探究のゼミ担任も加わることで、より多角的な見方、アドバイスができ

何が好きでどんなことをやりたいのか答えられるようになったこと。その結果、志望理由を自分の言葉で、根拠を持って言えるようになり、総合型選抜で学びたい大学に挑戦する生徒が増えていきます。中学入学時に「人と話すのが苦手」と言っていたある生徒は、探究で訪れた浅草で外国人にインタビューするうちに観光に興味を持ち始め、上野周辺のホテルを全て現地調査し、地域の活性化について研究しました。今、その生徒は観光学部に進学し、「大学での学びが楽しい」と報告してくれています。この生徒のように、大学で学ぶことを楽しみに思う生徒をもっと増やしたい。そのためには「My Project」をより充実させ、大学との連携も強化していきたいと考えています。

* 思考やアイデアを整理する手法の一つ

取材・文／本間学 撮影／荒川潤



いはいま・ひろゆき ●1960年北海道生まれ。1984年道都大学(現、星槎道都大学)社会福祉学部社会福祉学科卒業。児童養護施設の児童指導員を経て、1993年旭川福祉専門学校専任教員。1996年旭川大学女子短期大学部非常勤講師。1997年北海道教育大学教育学部旭川校非常勤講師。2005年道都大学社会福祉学部教授。同学部長を経て2021年より現職。



荒波に挑むトップ

私の改革論

No.46

星槎道都大学・学長
飯浜 浩幸

取材・文/仲谷宏 撮影/高橋龍次

小規模大学だからこそ 学生成長率No.1の大学へ

地域とグループの連携の強みを生かして、教育の充実を図る

キャンパスにあふれる アットホームな雰囲気

本学は、札幌市と新千歳空港の中間に位置する北広島市にある大学です。入学定員は260人で、経営、社会福祉、デザイン、建築を専門分野とし、小規模ながらも多彩な学びを提供しています。本

学の強みは、この規模感を生かした大学運営にあります。

本学を訪れた人がまず驚くのは、学生からのあいさつです。あいさつが習慣になっているスポーツクラブ所属の学生が多いこともありますが、他の学生にも、その習慣は浸透しています。学生同士、キャンパス内でお互

いに顔を合わせる頻度が高く、同じ大学の一人としての仲間意識が育ちやすい環境にあるからでしょう。あいさつをする学生に感化され、自然な行為として学生たちの間に広まっています。

同じことは、学生と教職員との関係でも起きています。上級生が教職員と親しげに話している様子

学生は、在籍する学科の専攻・コースの中からメジャープログラムを1つ選択するとともに、外部とも連携し学部横断型で開設している24のサブメジャー・プログラムの中から、自分の目標に合ったものを選んで履修します。その際、1つ以上のプログラムの修了が卒業要件となっています。メジャープログラムで自分の核となる学力・知識を身に付け、サブメ

ジャー・プログラムで資格取得や実践力の養成に取り組み。自らの専攻に加え、他学科や学外の学びを総合して「なりたいたい自分」や「やりたいこと」の実現をサポートするのが、この制度の狙いです。

北広島市では今、2023年に北海道日本ハムファイターズが自前の球場をオープンさせる計画が進んでいます。球場周辺はボールパークとして整備される予定で、官民による街づくりも並行して動いていきます。そこで、サブメジャープログラムに「ボールパークプログラム」を開講し、ボールパークの建設や、それに伴う街づくりなどに学生が関わる機会を提供しています。そのほかにも、「地域共生プログラム」や「みらい創造プログラム」などを開設し、地域の課題や未来について、街の人

たちや地元企業と共に考える

PBLなども取りそろえています。同じグループの通信制大学、星槎大学との連携では、教員免許の取得をめざす通信教育課程を提供しています。これにより本学では、幼小中高・特別支援の教員免許が取得できます。

教職課程に限らず、将来的には星槎大学との連携において、通信と対面をシームレスに組み合わせ、社会人や、対面が苦手な学生などを対象とした教育プログラムの開発も可能なはずです。それは、本学がめざすべき将来像の一つになると、私は考えています。

教育だけでなく学生募集においても、小規模ならではの強みが生かれています。

入試広報課の職員は、学生全員の状況をほぼ把握しています。加えて、ポータルシステムからは学生の成績や単位取得状況、DIPの到達度をリーダーチャートで示した情報などが取り出せます。高校訪問時には定性と定量の両面で、その高校の卒業生の様子をフィードバックしており、これが高校との信頼関係の構築に役立っています。

入試広報課の職員は、学生全員の状況をほぼ把握しています。加えて、ポータルシステムからは学生の成績や単位取得状況、DIPの到達度をリーダーチャートで示した情報などが取り出せます。高校訪問時には定性と定量の両面で、その高校の卒業生の様子をフィードバックしており、これが高校との信頼関係の構築に役立っています。

私の改革論

No.46

飯浜 浩幸

星槎道都大学・学長

星槎道都大学 ●1978年、北海道紋別市に道都大学として開学。2017年4月、星槎道都大学に名称変更 ▶社会福祉、経営、美術の3学部4学科、学生数970人 ▶建学の精神は「社会に必要とされることを創造し、常に新たな道を切り開き、それを成し遂げる。」

を普段から目にすることで、新入生も、それを当たり前と考えるようになりやすいです。学生が教職員に話しかけやすい空気も、学生同士が感化し合う中で形成されているのです。

こうした本学のアットホームな雰囲気は、オープンキャンパスで体感することができます。学生と教職員が気兼ねなく語らう様子を見て、本学への入学を決める高校生も少なくありません。

産学連携を強化し 教育の充実を図る

大学改革においても、小規模であることは、むしろメリットだと考えます。学内の資源に限りがあるため、必然的に外部に目を向けることになるからです。外部の人たちとのつながりは、さまざまな情報やアイデアをもたらします。それらが刺激となり、新たな挑戦に向かう意欲がかき立てられますし、得られた情報を関係者で共有する機会が増えれば、学内の風通しもよくなります。

2021年度から導入したメジャープログラム、サブメジャー・プログラムは、地域や、本学が加入している星槎グループとの連携から実現したものです。

学外の声を聞き、それを学内の改革にきちんと反映させることだと考えています。中期計画の遂行には、学外の人たちの協力が欠かせません。外部の声をもって生かせるしくみにするつもりです。

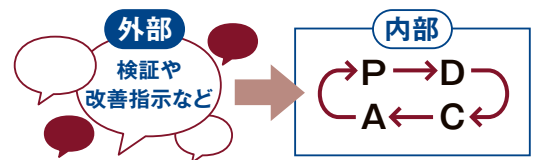
学修成果の可視化への取り組みもさらに進化させます。可視化しているDIPの到達度を、*ディプロマサブリメントの形にして、学生や外部に示せるものにしたと思っています。DIPの達成に関する大学の責任を明確にするとともに、全ての関係者が共通の視点で学生の成長を確認し、一緒に喜び合える大学にするためです。

今後も本学らしさを生かした改革を推進していきます。

* 学位の内容を説明・証明する証書

注目の経営指標

外部の声を生かした 内部質保証の実践度



学長の一番の役割は、学生や保護者、高校教員、地域などの外部のステークホルダーの声に耳を傾け、それが学内の教育・研究の改善に生かされているかをチェックすることだといふ。外部の力を借りなければ中期計画の達成はできない。そのために、外部とつながるしくみを構築する考えだ。